

寸言

一般社団法人 日本航空宇宙工業会
常務理事

高辻 成次



将来の日本への社会的責務

平成25年5月22日に開催された本工業会の第2回定時総会にて理事に、続く第8回理事会にて常務理事に選任され、このたび着任致しました高辻成次（たかつじじょうじ）です。本工業会の業務を総括・執行する今清水専務理事の下に、これまでどおり宇宙関連業務は秦常務理事が、そして航空関連業務は宮部常務理事の後任として私がそれぞれ分担執行致します。

先日、幕末期に幕府の勘定奉行等を務めた小栗忠順（おぐりただまさ）を主人公とするTV番組、「または辞めたか亭主殿」の幾度目かの再放送があり、視聴された方もあるかと思います。小栗はフランスの協力により、当時アジア最大の造船所（製鉄所）を横須賀に建設しました。当初はオランダに協力を打診したそうですが、「日本が船を造る必要はない、必要な船はオランダから買えば良い」と断られたとの事です。その後、横須賀造船所で修得した造船・製鉄技術等は、後の日露戦争時において日本海軍艦艇の造修に係る技術の中核として日本海海戦の勝利に貢献したのみならず、現在の造船業をはじめ各種工業技術発展の礎になったと言われます。小栗がオランダの言ったとおりにしていたならば、日本の近代化は回り道を余儀なくされていたのではないのでしょうか。

小栗と同時代を生きた二宮尊徳は、経済活動の社会的責務と経済の裏付けの重要性を「道徳なき経済は悪であり、経済なき道徳は寝言である」と説いています。仮に経済力が国家の基礎体力と見なせるならば、小栗による横須賀造船所建設は国家100年の基礎体力の向上という社会的責務を果たしたと言えるでしょう。観点を変えるならば、産業界の社会的責務の一つは「国家の基礎体力向上に資すること」と表現できるかもしれません。

さて国家の基礎体力向上の牽引役として、それ

ぞれの時代に適した成長産業が存在し、現代では航空機産業がその一つであると考えられます。なお、我が国の航空宇宙工業売上高に対する対GDP比は0.3%に止まっていますが、何れの先進工業国においても航空宇宙工業売上高の対GDP比は約1～2%であり、我が国におきましても他の先進工業国並みへの拡大が望まれます。また、平成21年に経産省から「今後20年間の民間機市場規模が約1.9倍に拡大する」旨の予測が出されていますように、今が重要な時期にあると思われます。一方、防衛分野では平成24年6月に防衛省から防衛生産・技術基盤研究会による最終報告が提出され、平成25年1月には閣議決定により現大綱の見直し等の開始、同年3月にはF-35の製造等に係る国内企業の参画についての内閣官房長官談話が出される等、環境が大きく変化しつつある時期にあります。

ダーウィンの種の起源は「変わり得るものが生き残るのである」と読み取ることもできると言われます。御承知のごとく我が国は様々な課題を抱えていますが、日本の基礎体力の維持・向上に我々は努めなければなりません。国家の産業高度化を先導し安全保障基盤を担う現代の戦略産業の一つとしての航空宇宙産業を発展させることは、将来の日本への社会的責務と考えます。そのため、現在の我々は何を如何に変化させるべきか、そして何を変化させるべきではないのかを弁別し、現在と未来の調和を図りつつ変化していくことが肝要であると認識しています。

最後になりますが、今般の本工業会常務理事への選任は非才の身には甚だ重く感じられる大任ですが、皆様のご支援をいただき、少しでも航空機産業の発展に貢献できますよう尽力して参る所存です。皆様からの御指導、御鞭撻の程宜しく御願ひ申し上げます。